



小海町で 一緒にお仕事 しませんか？

小海町では少子高齢化、過疎化などが進行しており、
“地域の担い手不足”という課題に直面しています。

「田舎暮らしに興味がある」「農林業を始めてみたい」「地域の活性化に携わってみたい」

といった方たちを対象に小海町を活動の場として、

共に活躍していただける“次世代の担い手”を募集します。

小海町

INTERNSHIP

小海町インターンシップ事業の受入先企業のご紹介

小海町には農業、建設業、小売業など様々な仕事があります。また、Iターン・Uターンしてきた方、町出身でそのまま働いている方など様々な働き方があります。

インターンシップの受入先である企業に、小海町で働くという想いをお聞きしました。

- P.2 … さかまき農園（農業）
- P.3 … 松原湖高原農場（農業）
- P.4 … 有限会社高原のパンやさん（製造・小売業）
- P.5 … 株式会社黒澤組（建設業）
- P.6 … インターンシップについて





農業を、いろいろな仕事のプラットフォームに

さかまき農園

東京から1ターンで小海に来て11年目。約40品目の野菜を栽培する「さかまき農園」を営む坂巻秀高さん。ここで採れた野菜の出荷先は個人宅配がメイン。また、加工品として始めたオリジナルのにんじんジュースは、町のふるさと納税の返礼品としても人気が高い。

「農業は、いろいろな仕事のプラットフォームになると思うんです」と坂巻さんは話す。「流通業、小売り、レストラン、いろいろな仕事が農業とつながることができる。異業種が絡み合うことで、もっといいもの、良いサービスが生まれると思う」とも。

そんな坂巻さん、実は農業に就くまでに、さまざまな仕事を経験してきた。香辛料メーカー、パン屋、社員食堂、中華料理屋、イタリアンレストラン。どんなジャンルでも「自分でお客さんを満足させられるエンターテインメントを提供したい」という思いがあった。農山村での地域おこしプログラムに参加したことで農業への関心が深まり、やってきたのが小海町だった。

本当に農業だけで暮らしていけるのだろうか？不安はゼロではなかったが、楽観的に考えられたこともあった。「食べ物を作るんだから、食に困ることはきっとないだろう」と。

「小海は寒暖差が大きいので、野菜は自然とおいしくなるんですよ」と笑う。自分で育てた野菜をおいしいな、と素直に思う。そうすると自分だけじゃなくみんなに食べてほしいな、と思う。すてきな連鎖が続く。

郷に入っては郷に従え、という言葉があるように、地方ならではの文化がある。ボランティアで消防活動を行う「消防団」や「道普請（みちぶしん）」という道路や水路の掃除、坂巻さんの住む地域では「三番叟（さんぼそう）」という人形使って能を演じる伝統芸能が受け継がれている。

知らない地域に来ると、必ず新しい文化に直面する。それをどう受け取るか。「びっくりしたことはたくさんあります。効率的ではないなと思うものも（笑）でも、受け身でいるだけではだめ。おもしろいことは自分で見つけてください」（坂巻さん）

坂巻秀高さんからメッセージ

「さかまき農園」を選んで来る方は、絶対に農業で成功しなくちゃ、といろんなものを背負い過ぎなくても良いと思うんです。ここで学んだ「農業」という経験をしっかり次のステップに生かしてくれるのであれば。例えば、ここで働いたあと、農業と全く違う職業に就いたってそれは良いと思います。プラットフォームとしての農業の可能性を、どんどん広げてほしいなと思います。

農業って、毎日毎日、作業が違いますよ。日々の気持ちの浮き沈みはもちろんあります。人間だから。でも野菜作りは1年がかり。その1年をしっかりと踏ん張れる方と一緒に働きたいですね。



経験 × 科学でもっと先の農業を

松原湖高原農場

親子三代続く、大規模農園。八ヶ岳を望む標高1200メートルの高原地帯に、白菜、レタス、キャベツなどを栽培する広大な畑が一面に広がる。夏でも適度な湿度を保ち、空気は清々しい。代表の小池浩二さんは、大学卒業後、大手企業に就職し国内の転勤を何度か経験して、28歳の時に小海町へ戻ってきた。家業の農園を継いで今年で10年目だ。

「東京では、生活の9割が仕事。それに、自分の裁量でできることは限られている。それならば、若いうちに技術を付けて、自分のやり方で仕事ができれば楽しいんじゃないか。それが自分にとっては農業でした」と話す小池さん。「技術を教わるためには、両親が元気なうちに戻ってこようと決心できた」とも。

模索を続けた「自分ならではの農業」。その一つが、土壌を使わないフルーツマトの養液栽培。ハウス内の環境をコンピューター制御しながら、光合成を最適化させ、養分を与える。「農業に経験や勘はもちろん必要ですが、科学が加わることで見込みが立てやすくなる」（小

池さん）。その責任者となったのが奥様の●さんだ。前職はエステティシャン。もちろん農業経験はなかった。「フルーツマトは繊細。丁寧に細やかに見ることができると女性の方が合っている」と小池さんは言い切る。「商品名を考えたり、ラベルのデザインを考えたり、いくらかでも広がりを持つ。野菜ソムリエの資格を取ったことで、これまでの彼女の経験を生かした活動も生まれそう」とビジョンを持つ。

地方は確かに若者が少ない。その分、ひとりひとりがきちんと期待されるし、活躍の場も広がると小池さんは考える。「保守的なところもありますが、小さいからこそ、各々にスポットライトがあたり、新しい流れを作ることだってできる。トップダウンではなく、ボトムアップで、町を変えていけるチャンスがここにはあります」。

「農業はこれからますますおもしろくなりますよ」そう話す小池さんは頼もしい。

小池浩二さんからメッセージ

農業は決して楽な仕事ではありませんが、仕事にメリハリがある。夜は地域の消防団などの活動に出ることで“自分はこの地域に住んでいるんだな”という実感が持てる。都会で働いていたときにはなかった充足感です。また、どういう仕事をしているか、子どもをはじめとした家族同士が理解している。その姿をみていれば、大変さも分かる。大切なことだと思います。

「儲けること」よりも納得した働き方で「生計を立てる」。そういう暮らしを考えている方にぜひ来ていただきたいです。小海の魅力もしっかりお伝えしますので、楽しみにしててください。



地に足のついた“田舎のパン屋さん”

高原のパン屋さん

どんな時間に行っても、豊富な種類の焼きたてパンが並んでいる。気取らない、安心の味。ロングセラーの定番商品はもちろん、実は新作のパンも多い。

昭和28年、給食用のコッペパンなどを作る小さなパン屋から始まり、現在は2代目の品田宗久さんが小海町と佐久市に2店舗を構える。この辺りで名前を知らない人はいないほど、地域に根付いている。

「高原のパン屋さん」のパンは日常の味でありながら、唯一無二の特別な味。昔と違い、今はスーパーでもコンビニでも、手軽にパンを買える時代だ。それでも、「高原のパン屋さん」は選ばれる。店に入った瞬間のパンの香り、たくさんの商品が並ぶ棚、好きなものを選んでトレイにのせ、レジで袋に詰めてもらう、そういう体験がたくさんの人に息づいており、特別な存在になっている。

「袋に入れて販売したらコンビニのパンになってしまうからね」と品田さん。ひとつひとつのパンに個性がなくなってしまう。それは避けなかったんだとか。

昭和40年に天然酵母を使ったパン作りを始めた。「この辺りで他にやっている人はいなかった。いろいろ失敗しながらも自分のレシピを作り上げるのは楽しい。やんちゃな店でいたかったんだよね」と笑う品田社長。そうしてできた食パン「もっちりやま」は、店の一番人気に育った。

今もその遊び心は忘れない。アイデアのつまった調理パンに力を入れたいと話す。「小海町は、果物も野菜も採れる地域。いろんなタイプのパンやソースとの組み合わせを試してみたい。可能性は無限大だね」。老舗でありながら、新作パンが多いのも頷ける。

多くのスタッフを抱えるようになり、働き方にも変化が生まれた。「働く環境についてもそれぞれ思うところがあるはず。働き方も社員主体で考えるようになった」と品田さん。朝の早いパン屋という職

業。スタッフの意向をくみながら営業時間を思い切って短縮させたことで、より主体的に働く姿勢が広がったという。

八ヶ岳の麓にある小海町の、おいしい水と澄んだ空気の中で作ったパン。頭ではなく、心で食べるパン。ここでしか作れないパンが今日もまた生まれている。地に足の着いた「高原のパン屋さん」だ。

品田宗久さんからメッセージ

“田舎暮らし”といっても、きっとそれぞれが想像する田舎というのは少しずつ異なると思います。何もない山の中なのか、コンビニくらいはあってほしいのか。暮らし方も、自給自足の生活がしたい、自然が近い場所で子育てしたいなど様々です。実際の田舎暮らしというのは、決して理想郷ではありません。でも、ここでは地に足の着いた暮らしができると思います。生きていくには現実的な生活力が必要です。「田舎でパン屋をやりたい」という方がいればぜひうちにお越しください。力になってもらいたいと思います。

地域のライフラインを担う責任

黒澤組（建設業）

小 海町を始めとした近隣地域の道路や橋、病院、学校、そして建設中の中部横断自動車道など。暮らしの中で必要とされるライフラインを整えるために、建設業はなくてはならない存在。そこに暮らす人あってこそ必要とされる仕事だ。

「良い会社であることが、良い地域であることにつながる」と話す、黒澤組代表取締役社長の黒澤和彦さん。地域のライフラインを担っているという責任感こそが、「地域貢献」の真の意味かもしれない。現在は、小海町に限らず、東信地域全体にも仕事の範囲は広がっている。

黒澤組では、25年間、毎日、従業員の弁当を自社で作っている。本社で働く人間だけでなく、現場にいる従業員の元には配達をしている。「現場の仕事は朝が早いんです。その生活リズムに、一緒に暮らす家族は少なからず影響を受けている。家族の負担を少しでも減らしたいという考えで始めました」と黒澤社長。また、社宅も完備。独身寮だけでなく、家族でも暮らせる3DKの部屋もあるので、これを利用する人は多い。

「地方だからと言って不利になることはどんどんなくなっていくと思う。かつてよりも交通網が発達し、中部横断自動車道も今まさに建設が進んでいる最中。できることはいろいろある」

そう話す黒澤社長が主導となり、15年ほど前、黒澤組は事業内容を広げた。それまでは道路や橋、トンネルなどの公共工事がほとんどだったが、住宅や別荘などの建築も積極的に行うようになった。その判断は功を奏し、建築分野の売り上げは伸び、全体の40%を占めるほどに成長した。

「会社がこれからも継続していくために“何が足りないんだろう”と常に考えています。企業として、これからどうなっていきたいか、そういうビジョンを持って舵を切るのは経営者である自分の役割。築いてきた経営基盤と、技術やノウハウを生かして、仕事の可能性や範囲を

広げていきたいと考えています」

創業から60年以上経った今、そしてこれからも、拠点は変わらず小海町に置き続けるという。そこからはまだまだ大きな野心が伸びている。

黒澤和彦さんからメッセージ

建設業というと、厳しい労働条件のイメージがあると思います。しかし、それは業界全体が抱える問題で、働き方については徐々に見直しが行われています。その一つが、「教育プログラム」の策定。かつては「上司や先輩の姿を見て学ぶ」ということが当たり前でしたが、コミュニケーションの形は時代と共に変化しています。正しい技術やノウハウを身に付けるためには、効率的な「教育プログラム」が求められるようになりました。当社でも「教育プログラム」を作成中です。

会社のため、社員のため、“何が足りないか”を考える中で、ぜひ、どんどん声を上げてほしいと思っています。インターンシップであっても、こういうものが必要だとか、そういう生の意見が聞きたいですね。

高原の小さなまち「小海町」インターンシップ研修生募集中

小海町では少子高齢化、過疎化などが進行しており、“地域の担い手不足”という課題に直面しています。そこで「田舎暮らしインターンシップ制度」では「田舎暮らしに興味がある」「農林業を始めてみたい」「地域の活性化に携わってみたい」といった方たちを対象に小海町を活動の場として、この地域ならではの様々な仕事を体験してもらい、また交流を通して、地域の魅力、地域活性のヒントを感じてもらおう新たなつながりを募集します。



●インターンシップ制度には各種コースを設定しております。

○農業体験コース

新規就農のための研修や、農業経営者への就労を視野に入れて、白菜、レタスなどの「高原野菜」などの栽培や収穫作業に取り組みます

○林業体験コース

町内の森林組合を受け入れ先として、監督員のもと、間伐、除伐などの一通りの林業の基礎知識を体験しながら学びます

○商業体験コース

町内のパン屋、豆腐店のもと、商品の製造工程、販売などの体験に取り組みます

※その他、養蜂家、ジャム加工者、飲食店、観光宿泊業、建設業者などの業種もあります

●実施の流れ

○募集 町ホームページを中心に告知、コースの選択

↓

○受付 随時受け付け

↓

○選考 申込書及び面接により、参加者の参加意図を勘案し、コースを設定

↓

○コーディネート

↓

○インターンシップ実施 期間 随時ワンスパン1週間(6泊7日)

↓

○インターンシップ終了後、報告書及び面接による総括



問合せ先

小海町役場 総務課企画係

小海町 インターンシップ **検索**

TEL : 0267-92-2525

〒384-1192 長野県南佐久郡小海町大字豊里 57 番地 1

